

原発ゼロへ 集会に200人

東日本
大震災

7年

東日本大震災から7年の節目の11日、東京電力福島第一原発の事故を教訓に県内の原発について考える集会「3・11メモリアルアクション 原発のない新しい福井へ」がJR福井駅前の

避難者 実情を語る



今も続く避難生活について話す木田節子さん＝福井市中央1丁目

ハピテラスであった。福島県富岡町から水戸市へ避難中の木田節子さんが終わりが見えない被災体験を語り、200人を超える参加者が聴き入った。

反原発団体などで構成する「さよなら原発福井県集会2018実行委員会」の主催。集会が始まると、午後2時46分より前に参加者

全員で黙禱を捧げた。

原発から8キロほどの自宅に住んでいた木田さんは「福島から避難して今」と題して話した。被災地の現状を写真で見せながら、「原発事故で家族4人はバラバラになり、19年間住んだ家に全員がそろったことはなかった」と振り返った。

「テレビや新聞では『あれから7年』などのタイトルで特集を組むが、福島を伝える場合には原発の収束状況がメイン。全国の再稼働には触れない」と指摘し、「原発の事故が起きてからでは遅い」と訴えた。

集会では、関西電力が再稼働を進める大飯原発3、4号機にも議論が及んだ。重大事故時の広域避難計画について、おおい町の住職宮崎慈空さんが「予定通りに大自然がふるまうと国は考えている」などと問題点を挙げる一方、会場近くでは再稼働の推進を訴える団体が自らの意見を表明していた。

(影山遼)